

(二〇一八年度)

6 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は22ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

志賀直哉の小説を読んで誰でも容易に気づくのは、いたるところに主人公の「気分」が書かれていることだ。中村光夫は、『暗夜行路』は主人公の気持の中の発展を書いた、という意味のことを作者は云っています¹が、事実この位、『主人公の気持』だけが徹頭徹尾書かれている小説もないのです²（『志賀直哉』）と書いているが、むしろ『暗夜行路』だけではない。ほとんどすべての作品が徹頭徹尾「主人公の気持」あるいは「気分」でつらぬかれているのである。むしろこういうべきではないだろうか、主人公の「気分」が書かれているのではなく、「気分」が主人公なのだ、と。

¹ これは言葉の綾^{あや}ではない。実際に志賀直哉の小説では、「気分」が主体なのである。そこでは「気分」はたしかに私の「気分」ではあるが、私が所有するものではなく、どこからかやってきて私を強いるものである。こういえば、私小説とは私を書くものでありエゴセントリックで他者を欠如した世界だという定説²に背反するようにみえるかもしれない。だが背反はしない。志賀直哉の世界では明らかに「他者」が欠落しているが、「私」もまた欠落しているので、ただ「気分」がすべてを支配しているというま³までである。

私は私小説を史的に考察することに関心がない。すでにそれは多くの論者がやったことだが、私の疑問はたとえば右に述べたような志賀の特異性が日本の文学・思想風土や彼の生い立ちに還元できないものではないかというところにある。志賀の小説の構造は、私小説を生みだした史的状況にも彼の知的幼児性というような個体史的な事実にも還元することはできない。なぜなら、「気分」が主体であるような「世界」はたえず現存するからであり、志賀の小説は構造的にみればまさにこういう「世界」のみを提示しているのである。

私はいつか、段々に千代を愛するやうになつて行つた。私は不機嫌な時に殊に其事を感じた。不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る事がよくあつたのである。

（『大津順吉』）

これは主人公が女中の千代を愛し父親の反対で別れさせられるという小説の一節であるが、右のような「愛の自覚」は実に奇妙なものである。話をしていると「不機嫌」が直るから、その女を愛している。これは一見すればふざけた話で、こんなことを平然と書く作者が疑わしく思えるのも当然である。ここにはスタンダールのいう「結晶作用」などはありようがなく、心理小説家なら丹念に描く経過が何もない。つまり、このとき「私」は主体的に愛そうとしているのでもなければ、恋を恋しているのでもなくて、ただ「気分」に従っているのみである。そして、「気分」と彼の判断・選択には一分の遊離もない。

これを、たとえば次のようにも見なすことができる。一つは、この主人公の心性は、機嫌が悪くぐずっていた児がうまくあやされて上機嫌になると同じであり、「愛」などというものを彼は知らないのだ、という見方である。愛するためには他者が自己とはつきりと区別された者として意識されていなければならぬが、彼の愛は自己愛と対象愛がまだ未分化な段階にある。もう一つ、これと関連していえるのは、志賀の小説の主人公がこのように「気分」で動くのは、他者と自己が未分化な「家」というものの範囲内において、あるいは家族と似たような交友範囲内においてであり、実際志賀はその外に出たことはない、というようなことである。

たぶん右の見方はまちがっていない。一言でいえば、それは志賀直哉の⁵「幼児性」ということになる。しかし、われわれは心理的な幼児性と思想的な幼児性を、すなわち「心理」と「思想」を混同すべきではない。もちろんこのことは明瞭に区別しえないものであつて、心理的には幼児性としかいいえないものが大概の作家・思想家にあるばかりでなく、そのもつとも本質的な核心が幼児性と切りはなしえないという厄介な事情が存するのである。この厄介な両義性を無視すれば、われわれはたんなる抽象的な観念だけをとりだすか、あるいは個人的な心理学だけをとりだすか、そのいずれかしかできない。そして、⁶「いずれも毛なことだ」。

志賀直哉の幼児性を指摘することはたやすいし、サルトルが『ボードレール』でやったような分析をすれば幼児性という刻印をまぬがれる詩人・思想家はめつたにいない。結局心理的な観察者には思想が思想たりうる場所が視えないというほかはない。だが、「反対に「心理」にすぎないものを「思想」に祭りあげる逆の危険もないわけではない。

『暗夜行路』を恋愛小説と呼んだ小林秀雄は、明らかに志賀の幼児性を「思想」とみなしている。しかし、この反語的な評価を「心理的なもの」から一方的に切りはなして、たとえば「ギリシヤ的」とか「原始的」とかいうような理念にまで抽象化することはできない。むしろ小林氏もそこまでやっつてはいない。

中村光夫は次のようにいつている。

……謙作の魅力がその野性あるいは肉体性にあることについては後に述べますが、しかしだからといって、一部の批評家のように謙作を作者が近代人の衰弱に對置した原始人間などと考えるのは、ひいきの引倒しに類するものです。

謙作の肉感性は、さきに述べたようにその生活の抽象性から生れたものであり、人間がこのように抽象的存在になり得るというのは、近代社会を背景としてはじめて可能なことなのです。謙作のように総てを「純粹に俺一人の問題」に還元し、周囲の人間など認めない生活無能力者が、原始社会に生き得るかどうかは考えるまでもありません。こういう「我儘者」などそこには存在を許されませんし、たとえいたにしろ、すぐに餓死か刑死の運命が彼を見舞ったのでしよう。〔志賀直哉〕

私は別に「一部の批評家」のように志賀直哉を理念化しようとは思わない。しかし、それを心理的にみようともしない。「気分」が主体となっている志賀直哉の世界は、それ自体として考えるべきものだからだ。それは幼児性でもなければ原始性でもなくて、個体がこの世界に存在するときの根源的な在り方に根ざしている。

志賀において、「気分」が自我主体から独立したもののよう⁷に存在していることは、次の例をみても明らかである。

自分の調和的な気分は父との関係にも少しづつ働きかけて行つた。然し或時、例へば妻と一緒に上京して電話で祖母を見舞ふと、丁度父が留守だから直ぐ来て呉れと母が云ふ。自分達は電車で直ぐ麻布へ向ふ。そして門を入らうとすると其所に立つて待つてゐた隆子が駈けよつて来て、小声で「お父さんがお帰りになつたのよ」と云ふ。自分達は門を入つただけで誰に

も逢はず、直ぐ引つ返して来る。かう云ふ場合、流石さすがに自分の調和的な気持も一時調子が変わる。然し又或る時、人の口から、父が自分の妹達などの事でジリジリと苛立いらだつて氣六むづかけしい事を云ふ噂うはさなどを聴くと、父のさういふ氣分の根が猶且なほつ自分との不快にある事を考へずにはゐられない点で、そうして今の自分が自分だけで調和的な氣分になりかけてゐるのにといふ氣のする点で、段々年寄つて行く父の不幸な其氣分に心から同情を持つ事もあつた。

(「和解」)

9 自分は父に同情するのではなく、自分と同じく「氣分」に強いられて身動きできない父に同情しているのであつて、あたかも両者の対立をもたらししているのが「氣分」それ自体であるかのような。事実「和解」という作品では父と子の対立の原因は何も書かれていない。なぜこの主人公が父に対する「不快」をつのらせて行き、あるいはまた「調和的な氣分」になつてきたのか、少しもわからないのである。

(柄谷行人「意味という病」)

〔注〕中村光夫(一九二一—一九八八)：評論家、劇作家、小説家。

エゴセントリック：自己中心的。

スタンダールのいう「結晶作用」：フランスの小説家スタンダールの『恋愛論』(一八三二年刊)の中に出てくる言葉で、恋する者が自己の想像や欲望によつて、相手を理想化していく作用を意味している。

サルトル(一九〇五—一九八〇)：フランスの哲学者、文学者。『ボードレール』は一九四七年刊。

小林秀雄(一九〇二—一九八三)：評論家。

謙作：『暗夜行路』の主人公、時任謙作。

問一 傍線部1「これは言葉の綾ではない」と筆者が言う理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 主人公の「気分」が中心におかれているのは、『暗夜行路』だけではないから。
- b 主人公の「気分」自体が描かれているというよりも、作者の気持の高揚が表象されているから。
- c 主人公や「気分」を使った言い回しは、志賀直哉の文体の特徴だけでは説明できないから。
- d 主人公と「気分」の関係性は、志賀直哉の小説の本質に関わる問題だから。

問二 傍線部2「定説に背反するようにみえるかもしれない」の文脈に沿った説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 私小説は本来自己を描くものなので、第三者を表現する志賀の小説はいわゆる私小説の考えにそぐわないように思える。
- b 私小説は、そもそも自己中心的なもので、中心のない志賀の小説は私小説の常識に反するように思える。
- c 志賀の小説に見られる、私が他者を強制するような作品の構造は、通常の私小説の枠からは外れているように思える。
- d 志賀の小説は、自分の外に存在するものに支配されており、私小説の一般的概念とは相容れないように思える。

問三 傍線部3「志賀の特異性が日本の文学・思想風土や彼の生い立ちに還元できないものではないか」と筆者が思う理由は何か、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 志賀が描く世界は、私小説にありがちな、日本独特の文化、考え方や作家の個人史の反映ではなく、古今東西を問わず現実に存在していると考えられるから。

b 志賀が描く世界は、私小説の歴史の変遷、作家個人の環境から説明することは難しく、作品の構造と主題を通してのみ明らかにしていくことができるから。

c 志賀が描く世界は、これまで論じられてきたように、私小説というジャンルが作りあげたものではなく、主体性が曖昧な世界だけを示していると考えられるから。

d 志賀が描く世界は、日本固有の環境、作家の気質にもとづくものではなく、私小説には必ずつきまとう特有の空気を表現したものだと考えられるから。

問四 傍線部4「こんなことを平然と書く作者が疑わしく思える」のはなぜか、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 千代を愛する作者は、積極的でも夢想的でもなく、ただ状況に従っているだけであり、このような人間には信用がおけないから。

b 小説家であれば、愛するという感情の機微を細かく描こうとするのが当然なのに、ここでは、主人公の心情の起伏はまったく描写されていないから。

c ここで示されている恋愛感情は幼子が感じるようなものであり、家庭的な愛情なので、それをわざわざ取り上げる作者は理解しがたいから。

d 常識的には愛情に結びつかない感情を真の愛のように描こうとするのは、常軌を逸したことであり、作家としてやるべきではないから。

問五 傍線部5「志賀直哉の幼児性」とはどういうことか、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 愛情の方向性が主体・客体どちらに向いているのか明らかではなく、さらに、自他の区別が曖昧な家庭環境の中で生きていること。

b 日本の家族社会にあつて、自分の機嫌がよくなることを愛情と考え、自分は常に身内によって守られていると自覚すること。

c 他人の感情に構わず、気分によって自己中心的に愛し、友達、家族に対して甘えが許されていると考えること。

d ナルシズムと無償の愛を分けて考えることができず、自分がいまだ抜け出ることのできない家庭に拘泥してしまっていること。

問六 傍線部6「いずれも不毛なことだ」と筆者が言う理由は何か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 心理的な幼児性と思想的な幼児性は区別すべきで、両者を同時に扱うことは結局一面しか見ないことになってしまうから。

b 抽象性は社会の領域で、「心理」は個人の領域であるが、この両領域の曖昧性こそが思想的問題だから。

c 「心理」と「思想」は別のものであるのだが、ある現象がこの二つの領域を含みもつことに留意すべきだから。

d 幼児的であることは、作家・思想家の複雑な中核を作っており、幼児性の捨象は、現実の不完全な認識につながるから。

問七 傍線部7「この反語的な評価」とは何か、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 『暗夜行路』の恋愛小説的側面は、心理にすぎないと考えること。
- b 『暗夜行路』に表われている幼児性を近代人の衰弱と捉えること。
- c 『暗夜行路』の評価に、抽象化された幼児性を認めないこと。
- d 『暗夜行路』に見られる幼児性に思想の存在を認めること。

問八 傍線部8「謙作を作者が近代人の衰弱に対置した原始人間などと考えるのは、ひいきの引倒しに類するものです」の説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 謙作の肉感性は、近代社会が生み出したものなので、彼の自然人としての感性を近代人と対峙させて捉えようとする
- b 謙作は抽象的な存在だと考えることができるので、彼の野性的姿は人間の根源的在り方だとする見方は、謙作に対する正しい評価を間違わせることになる。
- c 謙作の魅力である肉感性は近代的自我の一つであり、近代人の過剰な精神性を批判する原始的要素だと見なすのは、一方的な評価を敷衍したものすぎない。
- d 謙作は原始社会を体現しているように思えるが、それは表面的なことで、近代的人間の弱さと比較して考察するのは、牽強附会の評価だと言わざるをえない。

問九 傍線部9「自分は父に同情するのではなく、自分と同じく「気分」に強いられて身動きできない父に同情している」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 母に気づかう父を理解しながら同感するのではなく、自分と同様に不快によって追い詰められ、気分だけで妹達にまで辛くしている父を憐れんでいる。

b 自分と対立している父に共感するのではなく、歳をとるにつれて徐々に横柄になっていって、若い自分と同様に気分だけで行動している父を憐れんでいる。

c 父の不機嫌の原因を知り、気持を理解しようとするのではなく、自分と同様に、つかみどころのない気分動かされている父を憐れんでいる。

d 調和的になった自分を理解しようとしないうちに父に同意するのではなく、自分と同様に気分根本に不快感をもち、それに流され行動せざるをえない父を憐れんでいる。

問十 筆者の主張に合致するものを二つ選べ。

a 志賀の小説における「気分」は主人公に帰属するものではなく、ただそこに在り、主人公の行動を決定するものである。

b 志賀を理念的に捉えようとするのは、作家の幼児性・原初性を無視することであるから、不十分な解釈である。

c 作家や思想家の質を決定するのは、その幼児性が心理的であるか思想的であるかということにかかっている。

d 「気分」が主人公となっている志賀の作品は、人間存在の根源的なありさまを示している。

e 作家の心理を考察すれば、いつの間にか思想的問題とすり替えてしまうという認識の誤謬を犯さざるをえない。

f 志賀の私小説には、結局のところ「気分」は存在するが私は存在せず、他者の営みしか描かれていないと言ってもいい。

次は、明治十九年刊行の『經濟新論』(米國理學博士ラルネット述、宮川經輝訳、土井通豫編)の一部である。これを読んで、後の問に答えよ。なお、原本は漢字片仮名交じりで句読点を欠くが、漢字平仮名交じりとし、適宜句読点を補った。

紙幣とは、物貨を発売せんと欲する者の其の代価として領収すべき金又は銀貨を払ふための約束書なり。

(一)紙幣は金又は銀貨を払ふための約束書なり。蓋し、各国の紙幣、概ね皆然らざるはなし。之を例せば、合衆國の一弗紙幣には合衆國は一弗を払はざることを得ずとの明文を印記しあり。又、銀行紙幣には、某銀行は一弗を払はざることを得ずとの文あり。即ち金又は銀貨一弗を払ふと云ふ義也。日本の紙幣も亦必ず其の約束書なるを信ず。蓋し大藏省より發布する會計報告中、紙幣を國債中に算入するを見る也。乃ち紙幣は無利息債と称すべきものなり。

(二)金又は銀貨を払ふの約束書は皆悉く紙幣なりと云ふにあらず。仮令ひ、予五円を払ふべしとの約束書を認めたりとて、是れ紙幣にあらず。然るに予を熟知し、必ずその約束を履行することを信ずる者は、其の約束書を領収すべし。然りと雖も、予を知らざる所の多数の人民は、決して之を領収することなかるべし。予、若し世上に名を知られたる商人なれば、或は此の約束書を領収するもの多かるべしと雖も、之を領収せざる人民も亦たあるべければ、是れ決して紙幣にはあらざるなり。然り而して、政府に於て発行する所の紙幣は衆人の承認する所にして、何人にて之を領収するを以て、貨幣の一種たるを得るなり。尤も紙幣には其の甚だ善なるものあり、又甚だ悪なるものありと雖も、一般に流通し、衆人之を領収する間は、其の貨幣たるの資格を有するものなり。

紙幣は、正貨と異にして、其の価値は幾くか信用に關し、其の流通額は貿易上の作用によりて制限せらるるにあらず、乃ち政府の制定によれり。而して其の価値の変動甚だしく、時として全く其の価値を失ふことあり。

(一)予輩、紙幣を称して貨幣と云ふと雖も其の正貨即ち金銀貨とは甚だ異なる所あることを記憶せざるべからず。而して人民中、往々此の差異あることを遺忘し、紙幣の増加は恰も正貨の増加と同一の効用を有するものの如く思惟し、又或は紙幣のみを通用し、正貨を廢するも可なるが如き迷誤の思想を抱くものあり。

(二) 正貨の値は需要供給の理によりて定まるものにして、発行者の權威又は其の性質の如何に関するものにあらず。之を例せば、円銀を官立造幣寮に於て鑄造せんに、偶^{まれ}革命に遭うて、其の政府の倒れることあるも又戦争によりて一國の獨立を失ふことあるも、其の円銀の価に至ては、毫^{ちよ}も影響を及ぼすことなかるべし。墨^{メキシコ}西哥政府は数々革命によりて変更し、三十年以前に發行したる紙幣は全く其の価値を失うたりと雖も、三十年以前に鑄造したる弗銀は、今日尚ほ其の価格を失はず。尤も銀の供給増加したるがために、其の価値少しく低落したりと雖も、墨^{メキシコ}西哥の改⁷革のためには何の影響をも被りたることなし。然りと雖も、前にも既に述べたる如く、紙幣の値は、おもに人民の其の發行者を信ずると否とに關するを以て、何時にても銀貨と交換するを得べしと信任⁸するときは、則ち銀貨と同一なる価格を有すと雖も、若し其の信用墮落するときは、其の価も亦隨て低落するに至るなり。故に紙幣の価は、需要供給に変更なき時と雖も尚ほ大に變動することあるなり。

(三) 紙幣の流通額は、全く政府の制定すべきものにして、商売上の理法によりて制定するものにあらず。故に、偶紙幣の欠乏を訴ふることありと雖も、決して他國より輸入する能はず。又、充^{じゅうえい}盈したりとて之を他國に輸出する能はず、只^{ただ}之を制定し得べき者は政府又は銀行にあるなり。

〔注〕○物貨…品物、 ○円銀…円の銀貨、 ○弗銀…(ここでは)メキシコドルの銀貨、 ○充盈…満ち足りる

問一 傍線部1「日本の紙幣も亦必ず其の約束書なるを信ず」とはどのような意味か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 日本の紙幣も、きつとこの合衆国の約束書と同じだろう。
- b 日本の紙幣も、きつとこうした約束を書いたものだろう。
- c 日本の紙幣も、こうした約束で流通しているに違いないだろう。
- d 日本の紙幣も、この合衆国紙幣の約束書で信用されているだろう。

問二 傍線部2「紙幣を国債中に算入する」とはどのような意味か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 紙幣を国債の一種として、会計報告に計上している。
- b 国債を紙幣の一種として、会計報告に計上している。
- c 国債から紙幣を除いた額を、会計報告に計上している。
- d 国債の一部を紙幣で支払った額を、会計報告している。

問三 傍線部3「予五円を払ふべしとの約束書を認めたりとて」とはどのような意味か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「私が五円を払う」という約束書を認定したとしても
- b 「私が五円を払う」という約束書を信用したとしても
- c 「五円を払う」という約束書を、私が書いたとしても
- d 「五円を払え」という決定を、私が了承したとしても

問四 傍線部4「世上に名を知られたる商人なれば」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 世間で有名な商人であるので
- b 世間で有名な商人であつても
- c 世間で有名な商人ではなくても
- d 世間で有名な商人であつたなら

問五 傍線部5「貿易上の作用」とほぼ同じ意味の文中の語句として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 需要供給の理
- b 商売上の理法
- c 他国より輸入・他国に輸出
- d 何時にても銀貨と交換するを得べし

問六 傍線部6「紙幣を称して貨幣と云ふ」のは誰か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人民
- b 予輩、すなわち我々
- c 迷誤の思想を抱くもの
- d 予輩(余輩)、すなわち我々以外の人々

問七 傍線部7「墨西哥の數度の改革のためには何の影響をも被りたることなし」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a メキシコが數回革命を起こす程には、銀貨の資産は十分ではなかつた。
- b メキシコに何度革命が起きても、銀貨の価値は何の影響も受けなかつた。
- c メキシコに何度革命が起きても、銀貨は革命に何の影響も与えなかつた。
- d メキシコが數回革命を起こすには、銀貨の資産には何の不足もなかつた。

問八 傍線部8「信任する」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 他国が、紙幣の銀貨との交換を政府などに委任する。
- b 人民が、紙幣が銀貨と同一価格であることを信用する。
- c 政府などが、紙幣の発行者としての權威を人民に委任する。
- d 人民が、紙幣の発行者として政府などの權威を信用する。

問九 冒頭の二重線部「物貨を発売せんと欲する者の其の代価として領収すべき金又は銀貨を払ふための約束書」とは、誰が、何を領収するのか、この文章の趣旨を踏まえて、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 代価の支払いを約束する者が、物貨を
- b 代価の支払いを約束する者が、金・銀貨を
- c 物貨を発売しようとする者が、代価の約束書を
- d 物貨を発売しようとする者が、代価の金・銀貨を

三

次の文章 A、B を読んで、後の問に答えよ。

A

不満や苦しみがあつても、そこから抜け出そうと何かを始めるのは難しいことです。

一度できあがつた生活習慣は、ひじょうにしぶとい。根本的な心理として、可能なかぎり何でも「痛気持いたいい」ものとしてマゾヒズム的に耐えてしまおうとする傾向がある。極端には、ここでこうして生きているのは自分の運命だ、と捉えて耐え忍んでしまふかもしれない。

¹生とは、他者と関わることです。純粹にたった一人の状態はありません。外から影響を受けていない「裸の自分」など、ありえません。どこまで皮を剥むいても出てくるのは、他者によって「つくられた」構築された「自分であり、いわば、自分はずねに「着衣」なのです。

自分は「他者によって構築されたもの」である。

この肉体は、両親、さらに前の世代の遺伝子がシャッフルされたものです。遺伝的な傾向があつた上で、成長過程において他者と関わりながら、考え方や好き嫌いができていく。たとえば、サッカー観戦が好きだとして、それは必ずしもひとりですうなつたわけではない。それが「他者依存的」に構築された好みであることを、やろうと思えば、ある程度は客観視できるでしょう。父親が週末はサッカー観戦をしていたから、自分もいつしか好きになつていた、などの事情がある。また、人間だけでなく、物理的環境や、架空のキャラクターなど、広い意味での他者たちが自分の構築に関わっています。

²裸の自分などないというのは、注意してほしいのですが、「個性」がないということではありません。私たちは個性的な存在です。しかし、一〇〇%自分発の個性はない。個性とは、私たちひとりひとりが「どういふ他者とのように関わってきたか」の違いなのです。個性は、他者との出会いで構築される。自分の成分としての他者が、自分の「欲望」や「享楽」の源泉になつている。私たちは個性的だが、個性とは「他者依存的」なものである——本書では、この考え方をつねに念頭に置いてくだ

さい。

そして、言語という存在。

言語を使っている、すなわち「自分に言語がインストールされている」のもまた、他者に乗っ取られているということなのです。

「リンゴ」でも「これは美しい」でも、当たり前ですが、言語は自分自身ではない。言語は他者です。そして言語は、周りの他者（これは「他人」の意味）からインストールされたものです。他者が言葉をどう使うかを真似ることで、言語習得をしたわけです。

言語は、自分が生まれる以前からの「用法」を真似するという形でインストールされた。同様に、すべての他者もまた、他者による用法を真似して、言語を使えるようになっていく。

そういう言語習得の過程で私たちは、他者から、ものの考え方の基本的な方向づけを受けてしまいます。たとえば、何を「美しい」と言うのか、何が「遊び」であり何がそうでないのか……育った環境によって、用法の意味の範囲が異なりますね。

大げさに思うかもしれませんが、言葉のニュアンスの違いには、何か偏った価値観（イデオロギー）が含まれていると捉えるべきです。

すなわち、言語は、環境の「こうするもんだ」³ コードのなかで、意味を与えられるのです。だから、言語習得とは、環境のコードを刷り込まれることなのです。言語習得と同時に、特定の環境でのノリを強いられることになっている。

言葉の意味は、環境のコードのなかにある。

言葉は、実際に使われて初めて意味をもつ。本書は、こうした言語観を前提にして話を進めます。これは、ウイトゲンシュタインという哲学者の考えにもとづいています。

国語辞典に載っているのは、言葉の「本当の意味」ではありません。載っているのは、代表的な用法です。⁴ 辞典とは、人々が言葉をどう使ってきたのかの「歴史書」なのです。

言語習得とは、ある環境において、ものをどう考えるかの根っこのレベルで「洗脳」を受けるようなことなのです。

B

言語には、現実には縛られない独自の自由もあります。

たとえば、テーブルの上にリンゴがあっても、たんに言葉として、「リンゴは箱のなかにある」と、非現実的なことを言うこともできる。「ここにはクジラがいる」と言うことさえできる。

何でも「言えるには言える」わけです。

言語はそれだけで架空の世界をつくれる。だから、小説や詩を書くことができる。先ほどの「リンゴ」は現実に根ざした普通の言葉ですが、何を指すのでもないたんなる言葉をつくることもできる——「リゴンゴン」とか。さらには、論理的にありえないことまで「言えて」しまう——「リンゴはクジラだ」とか、「丸い四角形」とか。

こうした言語の自由さに、あらためて驚いてほしいのです。

言語能力は、現実的に行為しながら身につけていきますが、言語それ自体は、行為から切り離して使うことができる。要は、「言葉遊び」ができるということです。

言葉遊びは、言語を「それ自体」として取り扱うから、できるのです。

このことに十分注意を向けてください。言葉は、レゴ・ブロックで何かをつくるように、どうにでも、遊びで組み合わせることができると。

言語それ自体は、現実から分離している。

言語それ自体は、現実的に何をするかに関係ない、「他の」世界に属している。

このことを、「言語の他者性」と呼ぶことにしたい。すなわち言語とは、「現実まるごとに対する他者」⁵なのです。あるいは、リアルなモノに対し、言語は「ヴァーチャル」な存在であると言ってもいいでしょう。ヴァーチャルな存在としての言語が、現

実まるごとに対する他者として、現実から分離しているのです。

言語の他者性(言語は現実から分離している)のために、現実と言語の「唯一正しい」対応関係はないということになる。だから、環境によって言葉の意味が変わるのです。

そして、これがひじょうに重要ですが、まさしく同じ原理、言語の他者性(言語は現実から分離している)によって、言葉の、ある環境での偏った意味づけは必然的ではなく、いつでもバラすことができる、別の意味づけの可能性がつねに開かれている、ということになります。

いいでしょうか。つまり、言語の他者性は、Xの、両方の原理になっている。ここが核心なんです。

(千葉雅也「勉強の哲学」)

〈注〉インストール：ソフトウェアをコンピュータに導入すること。

レゴ・ブロック：プラスチック製の小さなブロックでできた子供向けの玩具。組み立てて遊ぶ。

ヴァーチャル：仮想的。

問一 傍線部1のように筆者が述べるのはなぜか。その理由として適切でないものを次の中から一つ選べ。

- a 意識化されているか否かにかかわらず、私たちが生きてきた環境には、必ず他者の存在があるから。
- b 我々の嗜好しこうひとつをとっても、それは他者依存的に構築されたものと言えるから。
- c 自分の生活習慣からなかなか抜け出せないように、変化を望んでも、他者はそれを承認してくれないものだから。
- d 他者と関わることを通さずには、自分という人間を作り上げていくことができないから。

問二 傍線部2はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 他者との関わりが全く影響せず、完全に自分の中からわき出た「個性」はないが、他者と無関係にわき出た「個性」もある程度は存在し、私たちは十分に個性的な存在であると言える。

b 自分は他者との関わりの中で作り上げられたものだが、その関わり合い方に個人差がある以上、「個性」がないとは言えない。

c 自分は常に他者との関わりの中に存在する「着衣」であり、裸の自分は存在しないが、その「着衣」を欲望に合わせて選ぶ「個性」は存在している。

d 「個性」とは他者依存的なものであると認めることができ初めて、自分の個性を客観視する可能性がひらかれてくる。

問三 傍線部3はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 言語は実際の用法を真似ることを通して習得されるので、周りの環境による個々の偏りを内包しながらその意味が方向づけられる。

b 言語はつきつめれば他者であるため、私たちは環境からの強制にかかわらず、言語を主体的に受け取っていくことを通して意味を習得している。

c 言語習得の過程は、自分に周囲の言語をインストールする過程であるため、ある個人にとっての意味≠用法は、周囲の環境と常に等価なものとなる。

d 言語習得とは環境のコードを刷り込まれることなので、言語の意味を問うことは無意味であり、その用法の積み重ねの方が重要である。

問四 傍線部4はどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 国語辞典に載っているのは、単語本来の意味の記述ではなく、一人の人間が主観的に整理した用法の集積である。
- b 国語辞典に掲載されているのは、言葉の意味の歴史的記録であり、現実の言語使用のためには役立たない。
- c 国語辞典に載っている意味は、載せられた時点で実際の使用を離れ、意味を説明したものはなりえない。
- d 国語辞典に掲載されている意味は、過去の用法の主なものを示しているという点で歴史の記録である。

問五 傍線部5はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 言語は、一つ一つの環境における個別の意味ではなく、そのような意味づけの集合として見るべき存在である。
- b 言語は、本質的にはヴァーチャルな存在であり、その意味するところも環境により変わりうる存在である。
- c 言語は、実際には現実の行為と無関係に習得したものであって、その意味からも現実とは対立する存在である。
- d 言語は、現実の体験を写し取ると同時に、現実と切り離して、虚構の世界を組み立てることもできる存在である。

問六

X に当てはまる語句としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 現実からの分離と、非現実からの分離
- b 現実からの自由と、現実による自由
- c 環境による洗脳と、環境からの脱洗脳
- d 環境による意味の確定と、環境による意味の不確定

問七 本文A、Bの趣旨として適切なものを次の中から二つ選べ。

a これまで生きてきた環境に言語の刷り込みを通して制約された私たちにとって、「言語」は自分たちに無条件に与えられ、内部に取り込まれた「他者」である。

b リアルなモノに対して、言語は非現実的な存在であり、両者の間にある矛盾が「言語の他者性」という形で常に私たちに突きつけられる。

c 言葉は実際に使われて意味を持つものであるため、「言葉遊び」を行うことが現実と分離したヴァーチャルな「言語の他者性」を導く一つの方策となりうる。

d 「言語の他者性」は、他者依存的に構築された自分を洗脳から解き、現実と言語の正しい対応をもたらす一つの可能性である。

e 現実だけでなく、非現実も表現しうるのが言語であり、この現実と分離した「言語の他者性」は、私たちが言語を用いて現実から自由になれる可能性を示唆している。

